

委員会・組織名 入試・国試1 医学部入試検討委員会

入試センター長

中間責任者②(部長・委員長等)氏名 中川 淳

※1該当事項

①新中期計画、②当年度事業計画、③前年度最終報告課題、④独自の課題、⑤自己点検評価委員会からの指摘事項、に分けて記載してください。

※2評価

S: 優れて達成している A: やや優れて達成している B: 概ね達成している
C: やや達成が不十分 D: 全く達成できていない

	委員会・組織が策定・作成(「箇条書き」で「端的に」、文末は「だ・である」調、もしくは体言止め)				教育研究推進委員会による点検・評価			
	目標・計画(具体的、かつ実現可能なもの) (教務委員会・入試検討委員会のみ)3つのポリシーに紐づく目標・計画を一つ以上設定し、別紙コード表を参考に該当項目のコードを目標の後に記載してください。	該当事項(※1)	中間報告	最終報告		中間報告評価	最終報告(案)	
			途中経過・状況	評価(※2)	部門講評		評価(5段階)	講評
当初 目標・計画 (5つまで)	1 志願者延べ数5,100人の獲得 2 偏差値70.0かつ私立医科大学トップ5の維持 3 入学者選抜要項に則った2月入試に向けた令和9年度入試のスケジュール作成、入試指針作成 4 教員への面接評価のフィードバック体制構築の手法検討 (AP) 5 教育センターの分析をもとに選抜方法の妥当性を検討 (AP)	②③ ① ③④ ④ ⑤	新潟県地域枠の廃止に伴い、新潟県関係の説明会が全て無くなった他、複数の説明会が運営の都合で実施取りやめになり、昨年度同時期で21件あった説明会への参加は、16件となった。今後の予定は昨年ベースとなっているので、説明会を通じての志願者への広報の場は減少する予測である。しかし、オープンキャンパスは過去最高の参加者(578組1,169名)を更新した。また、キャンパス見学の参加者も堅調で、昨年と比較して同時期で10組以上多く、外部広報の減少を内部運営でカバーし、志願者への確保・情報提供に努めている。 昨年に引き続き大手予備校による発表で、偏差値は70.0を維持している。 大阪・東京・名古屋は会場が確定した。福岡は従前から利用している会場を候補として10月に交渉する予定である。なお、試験日程は次年度の予告としてHPを通じて近日中に公開する予定をしている。また、日程確定に伴い、合格発表までの詳細スケジュールの検討に入った。 面接小委員会で「個人へのフィードバックではなく、面接評価における在学生の進級状況や国試合格率の状況を盛り込んだ全体の状況をフィードバックする」ことが決定した。現在はFDへの周知に向けて素案を作成中である。 9月30日に外部委員を交えて入試の妥当性を検証するための委員会を予定している。	C S A C A	推薦志願者334名(前年度53名減)、前期日程志願者3,541名(前年度190名減)と志願者が伸び悩んでいる。説明会やオープンキャンパスの参加者増と比較して、志願者数は伸びておらず、現状のままでは目標値の達成は難しいと言わざるを得ない。偏差値が上昇したことにより、これまで受験していた下位層及び中間層の受験者が一定数受験を避けていることが推測される。 直近の偏差値でも70.0を維持して、私立医科大学トップ5を堅持している。また、学校推薦における1次試験受験者の平均点が上昇していたことから、志願者のレベルが上がっていることが推察される。 全ての入試会場が確定し、令和9年度入試の実施を令和7年9月4日に公表した。また、合格発表までのスケジュールも委員会を通じて承認を得た。 委員会で、リスクファクターなど様々な要因を踏まえた上でフィードバックの内容を検討することになり、FDでのフィードバックを行わず、現在も精査中である。 外部委員に選抜試験の妥当性を検証してもらいつつ、令和10年度学校推薦型選抜試験の変更(全体の学習状況の引き上げ)を行った。既に令和7年11月14日に学外公表を行いつつ、当該年度に受験の可能性のある本学への接触者や推薦試験を受験したことがある高校へ情報共有を行った。	オープンキャンパスの参加者も過去最高であり、多くの志願者を獲得できるものと推察できる。 最終報告を待つ。 着実に進んでいる。 最終報告を待つ。 最終報告を待つ。	B S S C A	オープンキャンパス実施時点では多くの志願者確保が見込まれたが結果に繋がらなかった。偏差値以外の理由があるのか、検証が必要。 目標を達成した。 着実に進め、決定することができた。 次年度の対応に期待する。 委員会での検討内容を踏まえ、制度の変更を実施できた。
期中追加 目標・計画								

目標以外の取り組み・成果(最終報告時に記載)	委員会評価	委員会講評
上記目標以外での3つのポリシーを踏まえた活動(対応コードもカッコ書きで記載)		
アセスメント・ポリシーに則る点検・評価(留年率、国試合格率など、数値化可能な成果を記入)		
出願者数 学校推薦型・特色選抜試験 334名(前年度387名)、一般選抜試験(前期)1,797名(前年度1,907名)、大学入学共通テスト利用選抜試験829名(前年度890名) 大学入学共通テスト・一般選抜試験併用試験827名(前年度847名)、地域枠選抜試験88名(前年度87名)	B	偏差値が上昇したことにより、志願者減は想定内であるが、他に理由がないのかを早急に検証する必要がある。

委員会・組織名 入試・国試2 看護学部入試検討委員会

看護学部入試副センター長

中間責任者②(部長・委員長等)氏名 三木明子

※1該当事項

①新中期計画、②当年度事業計画、③前年度最終報告課題、④独自の課題、⑤自己点検評価委員会からの指摘事項、に分けて記載してください。

※2評価

S:優れて達成している A:やや優れて達成している B:概ね達成している
C:やや達成が不十分 D:全く達成できていない

		委員会・組織が策定・作成(「箇条書き」で「端的に」、文末は「だ・である」調、もしくは体言止め)			教育研究推進委員会による点検・評価				
		目標・計画(具体的、かつ実現可能なもの) (教務委員会・入試検討委員会のみ)3つのポリシーに紐づく目標・計画を一つ以上設定し、別紙コード表を参考に該当項目のコードを目標の後に記載してください。	該当事項(※1)	中間報告	最終報告		中間報告評価	最終報告(案)	
				途中経過・状況	評価(※2)	部門講評		評価(5段階)	講評
当初	目標・計画 (5つまで)	1 延べ志願者数1,800名の獲得とアドミッションポリシーに適合する新入生を確保する。(AP)	①②③	大学入学選抜実施要領及び入学受け入れ方針(アドミッションポリシー:AP)に基づき、中立かつ公平・公正に入学選抜を実施するための準備を進めている。オープンキャンパス(OC)および受験生サイト(Web)でAPを周知している。志願者数獲得のため、令和8年度入試から一般選抜試験を2日程で実施することで目標延べ志願者数を確保する。全国的に私立大学の看護の志願者数が減っている中、本年度の志願者数に直結する高3生・既卒者のOCの参加者数は、前年比98.6%(累計値545名/前年累計値553名)であった。近畿圏以外の来場者もあり、今後の志願者動向に注視していく。	S	志願者数は、学校推薦型選抜試験の専願制・指定校制179名、併願制83名、一般選抜試験の2教科型573名、3教科型747名、共通テスト利用選抜試験の2教科型151名、3教科型179名、5教科型111名、合計2,023名(前年1,306名)で前年より717名増(推薦21名増、一般576名増、共通テスト利用120名増)となった。開設以降、初めて志願者数が2,000名を超えた。また、学校推薦型選抜試験の試験内容を変更し、入試結果を通してAPに適合する新入生を確保できたと考えられる。	オープンキャンパス参加者数はほぼ昨年と同数である。試験日程の増加に伴う志願者数の確保に期待する。	S	志願者数は2000名を超え、かつ、試験内容を変更したことにより、APに適合する学生の確保に繋げることができた。
		2 近畿圏私立大学(看護学部)トップを目指す。	②③	入試コンサルティング会社の資料によると、全国に比べて近畿圏の私立大学の難易度は維持されており、看護学部は近畿圏のトップグループに位置し、偏差値52.5を維持している。また、5月に実施された第1回全統共通テスト模試の志願動向では、本学を志望する者の中での成績上位人数が前年比93.4%となっている。昨年よりも減少しているものの、引き続き成績上位者の獲得が見込まれる。	A	10月に実施された第3回全統共通テスト模試の志願動向でも、本学を志望する者の全体数は前年比87.6%と減少した。しかし、全体数に占める成績上位人数の割合は今年35.8%(前年37.2%)と大きな変動は見られなかったため、今年も引き続き成績上位者の志願者が見込まれると予測される。入試コンサルティング会社の資料によると偏差値は今回も52.5を引き続き高い値を維持している。	最終報告を待つ。	A	偏差値はトップグループを堅持することができた。
		3 少子化の加速、看護系志望の学生の減少、関西圏を含めた看護系大学の新設が続くなかで受験者の質・量をともに確保する。	①②③	受験者の「質」の確保については、本学に継続して入学実績があり、かつ偏差値60以上の68校に、看護学部教員が高校訪問し、進路指導教員と対面することで優秀な学生の志願へと繋げている。また、「量」の確保について、本年度のオープンキャンパスの参加者数は累計で1,038組1,923名(前年比99.95%)で維持している。オープンキャンパスに参加した高校3年生・既卒者の志願状況は今後追跡し、分析予定である。	A	学校推薦型選抜試験(専願制・併願制・指定校制)における偏差値65以上の高偏差値帯高等学校からの志願者数は、87名/262名(前年91名/241名)であり、志願者割合は、33.2%(前年38.2%)であった。学校推薦型選抜試験においては受験者増となり、量を確保でき、高偏差値帯高等学校からの出願も概ね前年並みとなり、質の確保もできた。また、オープンキャンパスに参加した学生の学校推薦型選抜試験出願率は専願制80.4%(前年66.0%)、併願制62.7%(前年42.6%)となり、出願率が専願制・併願制ともに大幅に上昇した。	積極的な活動ができていた。最終報告を待つ。	A	オープンキャンパス参加者からの出願は大幅に上昇し、強く本学を志願する受験生の確保ができていた。次年度は、高偏差値帯高等学校からの志願者増を期待する。
		4 拡充した指定校制度によって優秀な学生をより多く確保する。(AP)	③	本年度から2校から10校へと指定校を増やし、本学が求める優秀な学生の確保に繋げるため、指定校先には履修科目において数学や理科に重きを置いた指定条件を課す内容で4月に通知した。	B	指定校制対象の10校のうち7校から学校推薦型選抜試験に出願があった。7校のうち5校の学生は成績が振るわなかったが、高校側と緊密な連携をとり、当制度を継続することで優秀な学生をより多く確保していきたい。	最終報告を待つ。	B	指定校制度を拡充したが、結果に繋げることができなかった。次年度に向け検証が必要である。
		5 学校推薦型選抜試験で新たに実施する小論文試験、面接試験、調査書、志望理由書、活動報告PR書による採点制度において、適切な入学選抜実施体制を確立する。(AP)	④	新たに実施する試験や提出書類に関する評価は、小論文審査小委員会、面接小委員会、活動報告等評価小委員会で、複数回の会議を経て、評価項目および評価基準を決定し、8月18日の入試検討委員会の承認を得た。	A	評価者は各小委員会で教授・准教授の中から選定し、適切な入学選抜実施体制を確立できた。	着実に進めることができた。	A	評価の質保証に向け、より適切な対応が求められる。
期中追加	目標・計画								

目標以外の取り組み・成果(最終報告時に記載)	委員会 評価	委員会講評
上記目標以外での3つのポリシーを踏まえた活動(対応コードもカッコ書きで記載)		
アセスメント・ポリシーに則る点検・評価(留年率、国試合格率など、数値化可能な成果を記入)		

委員会・組織名 入試・国試3 リハビリテーション学部入試検討委員会

リハビリテーション学部入試副センター長

中間責任者②(部長・委員長等)氏名 佐藤春彦

※1該当事項
①新中期計画、②当年度事業計画、③前年度最終報告課題、④独自の課題、⑤自己点検評価委員会からの指摘事項、に分けて記載してください。

※2評価
S:優れて達成している A:やや優れて達成している B:概ね達成している
C:やや達成が不十分 D:全く達成できていない

	委員会・組織が策定・作成(「箇条書き」で「端的に」、文末は「だ・である」調、もしくは体言止め)				教育研究推進委員会による点検・評価			
	目標・計画(具体的、かつ実現可能なもの) (教務委員会・入試検討委員会のみ)3つのポリシーに紐づく目標・計画を一つ以上設定し、別紙コード表を参考に該当項目のコードを目標の後に記載してください。	該当事項(※1)	中間報告	最終報告		中間報告評価	最終報告(案)	
			途中経過・状況	評価(※2)	部門講評		評価(5段階)	講評
当初 目標・計画 (5つまで)	1 理学療法士、作業療法士への強い志を持ち、卒業と同時に国家試験に合格できる入学者を獲得する。(AP) 2 総合型選抜試験では状況設定型の面接を導入し、問題解決能力やコミュニケーション能力を評価し、医療従事者としての適性が認められる入学者を選抜する。(AP) 3 学校推薦型選抜試験では指定校推薦枠を設け、優秀な学生を早期に確保する。 4 目標志願者数は昨年度実績を鑑み、延べ人数として定員の4倍程度(理学療法学科240名、作業療法学科150名)とする。 5 作業療法学科では、特に学校推薦型選抜試験、一般選抜試験における志願者数を増加させ、入学定員の充足を図る。	① ① ①② ①② ③ ①② ③	国家試験に合格できる入学者を獲得するため、総合型選抜試験、学校推薦型選抜試験の試験科目、面接方法の見直しを行った。 面接小委員会において、問題解決能力やコミュニケーション能力をいかに評価するか検討し、面接評価票の見直しを行った。 優秀な学生を早期に確保できるよう指定校の選定及び高校への依頼を行った。 高校進路ガイダンス参加条件の見直し及びオープンキャンパスでの学生・卒業生の関わりについて見直しを行った。現在、オープンキャンパス等のイベント、高校訪問の分析を行っている。 作業療法学科では定期的にオープンラボを開催し、作業療法の魅力、本学の魅力を知ってもらう活動を行っている。学校推薦型選抜試験では作業療法学科のみの指定校も設け、優秀な学生を早期に確保する取り組みを行っている。	S A A S A	総合型選抜試験において、プレゼンテーションを廃止したことで受験しやすくなり、さらに学校推薦型選抜試験の基礎学力試験を廃止および指定校制を導入した結果、志願者数(総合型と推薦型を合わせて)は前年比218%となった。また、総合型選抜試験の面接方法を見直した結果、優秀な学生を確保できた。 状況設定型の面接を導入し、面接評価票の見直しを行ったことで、より医療従事者の適性を評価することができた。ただし、初年度ということもあり課題もあるため面接小委員会で審議する予定である。 教員による高校訪問を実施した結果、指定校(理学療法学科5校、作業療法学科6校)からの出願があり、優秀な学生の確保につながった。 高校進路ガイダンスの参加条件である偏差値を下げ、近隣地域を絞ったことでよりリハビリテーション学部を志願する学生が増え広報することができた。また、志願者(総合型・学校推薦型)の80%がオープンキャンパスに参加した学生であった。令和8年度入試志願者の延人数は理学療法学科339名、作業療法学科137名となった。 作業療法学科ではオープンラボを年6回開催し、参加者の出願率が75%となった。また、参加者のうち、学校推薦型選抜試験の指定校制に両学科1名の志願者がいたこともあり、来年度も継続する予定である。	最終報告を待つ。 着実に進めることができた。成果に期待する。 最終報告を待つ。 最終報告を待つ。 積極的な活動ができています。	S A A S A	試験科目、面接方法を見直した結果、大幅に志願者が増えたことは評価できる。 面接手法を抜本的に変更した。次年度実施に向け、課題解決が求められるが成果に期待する。 指定校制度を用いた出願があり、優秀な学生を確実に確保することができた。 オープンキャンパス等の広報により、志願者を大幅に増加することができた。 作業療法学科の目標志願者数には満たなかったが、様々な募集活動が出願者増に繋がった。
期中追加 目標・計画								

目標以外の取り組み・成果(最終報告時に記載)	委員会評価	委員会講評
上記目標以外での3つのポリシーを踏まえた活動(対応コードもカッコ書きで記載)		
アセスメント・ポリシーに則る点検・評価(留年率、国試合格率など、数値化可能な成果を記入)		

